

【書評】

生物学 特集 「新しい学問としての動物看護学」

浅川 満彦

(酪農学園大学獣医学群獣医看護学類 獣医寄生虫研究室)

終戦直後から日本生物科学者協会が『生物科学』という雑誌を刊行している（出版元：以前は岩波書店、現在は農文協。なお、この協会は当該誌の編集委員会を兼ねる）。この雑誌は「生物学の中でも特に進化学、系統学、分類学、生態学、行動学などの（中略）分野の総説を中心に編集」されてきたが、加えて「生物学の周辺分野、生物学の方法論、科学哲学、生命倫理、生物学教育など、生物学と社会、生物学と他の分野との橋渡しになるような論文」（以上「」内は農文協HPより改変）も掲載し、中学校あるいは大学教養課程の生物担当教員を中心に多くの読者を獲得している。掲載にあたっては厳しく審査されるので査読誌でもある。この雑誌は「特集」が目玉となっており、過去には犬や家畜の形態進化・生理・行動などの論文掲載があったが、直接、獣医学に関しての特集はなかった。しかし、2018年2月発行の第69巻2号では、動物看護学特集が編纂された。このような応用分野領域が特集されることは、70年間の『生物科学』の歴史上、あまり例がなく画期的なできごとである。

著者は編集委員会副委員長の立場でこの特集を企画したが、その背景を少し説明する。ここ数年、酪農学園大学獣医学群内の教員配置の学内事由から、獣医学類教授1名が1～2年の任期で獣医看護学類に出向（異動）していた。著者の前任者はこれまで3名が出向をしていた。そして、4人目が既に決定していたが、2017年2月、同学群人事委員会は次年度出向予定者の人事が、急遽取り止めになったと報告を受けた。当時筆者は、獣医学類の感染・病理学分野長として獣医学群執行部の立場として、これを重く受け止め、当該人事案件を筆者が引き受けた。その条件として、出向期間をこの体制が終了する2020年3月までの3年間として欲しいと、当時の北澤多喜雄学獣医学群長（現在は獣医看護学類長）に提案し了承された。3年間あれば、新興学問分野である動物看護学に関して、ある程度理解できるだろうと考えたからである。そして、手始めに、『生物科学』に動物看護学特集を掲載する企画をした。幸運にも優れた執筆陣に恵まれ素晴

らしい内容となった。北海道獣医師会の皆さんにも、是非、知って頂きたいと考え、今回、紹介させていただくこととした。

巻頭はヤマザキ学園大学・若尾義人名誉教授が「伴侶動物における動物看護学－動物看護理論の必要性」で、多様な動物種を看護するため、統一した看護理論策定は困難であるが、学問体系確立のためには必須であるとして理論構築の試みを披瀝した。次いで、ヤマザキ学園大学・山川伊津子講師は「動物看護の歴史－イギリス・アメリカ・日本の比較」と題した総説では、動物看護学の時間的成立過程を詳述した。動物看護師は英国で誕生し、以降欧米では社会的に認知された職業であるが、日本では統一資格はできたものの、公的な専門職としては認知されていないなど、英米とはかなり異なる背景がある。日本で本気に動物看護学を興隆させるためには、この比較検討の結果を吟味しないと難しいであろう。第3論文は慶応大学・桜井富士朗教授と帝京科学大学・清水宗春講師の「伴侶動物の経済動向と動物看護師」で、多種多様化したペットビジネスの経済動向と動物病院の実態を詳述した。すなわち、現状分析であり、これは先ほどの過去を重ね合わせると、将来の動向を予測できる。動物看護学を標榜する大学で、その生き残りを模索するには必須の情報である。ところで、動物看護学大学は国内に8校（2018年4月には9校目が誕生）あるが（専修学校は70校以上）、学問体系に基づく動物看護学の教育課程が斉一的に準備されている必要がある。獣医学ではモデル・コアカリキュラムが立ち上がった。同様な試みが動物看護学でもあり、日本獣医生命科学大学・石岡克己教授が「動物看護学の教育とコアカリキュラムの策定」と題する論文で解説を加えた。2017年に完成した認定動物看護師コアカリキュラム策定を主導したのが石岡教授で、そのお立場でなければ判らない内容は迫力がある。

動物看護学が独立した科学たり得るのは、固有な研究が包含されるからである。大学は研究を基盤にして教育する場である。既に、多数の研究があるが、この特集では2本のトピックを収載した。一つはヤマザキ学園大学（倉敷芸術科学大学異動予定）・川添敏弘准教授の「動物介在活動・動物介在介入の歴史と展望」、もう一つが酪農学園大学・北澤多喜雄教授の「伴侶動物におけるグレリン研究－基礎とその臨床応用について」である。前の総説では犬によるアニマルセラピー（動物介在活動）を様々な分野の専門家による動物介在介入というケア過程として捉え直した。動物を介在させた暮らしがどのように展開されてきたのか、古来のオオカミとの関係から

歴史を辿りながら記述し、現在の先駆的なアニマルセラピー事例を紹介した、実に画期的な論文である。後の総説は新規消化管ホルモンであるグレリンの基礎的知見を紹介するとともに、この物質が獣医療分野でどのような疾患を標的とした創薬のシーズに成りうるのかを解説した。

本特集の結語として、この特集の編集者であるヤマザキ学園大学・内田明彦教授と著者とが共同で「獣医療のための関連従事者の必要性」と題して解説を加えた。この解説では動物看護師と新規職種「動物保健師」のミッションについて提起した。動物看護大学の出口管理を模索する上で必読である。実は、内田教授の専門が動物寄生虫(病)学であり、著者にとって30年以上の大先輩にあたる。個人的な話題が続き、誠に恐縮であるが、動物看護学コアカリにおける動物寄生虫学教科書でもお声をかけて頂き、執筆させていただいた。執筆当時は動物看護学の概念や哲学を、今よりはるかに知らない状態で、内田教授が示された事項を単に埋めていただけであった。しかし、動物看護学のポリシーを知り得たことは何にも代え難い。もちろん、内田コネクションで、特集でも最適の執筆者を布陣していただけた。そのような意味で、実に幸運であった。

本特集は、以上のように、動物看護学の定義、歴史および教育、伴侶動物の経済学、動物介在療法などを網羅した資料となっている。広く論議して頂く契機として頂きたい。



生物科学 動物看護学特集
 生物科学 69巻2号
 著者日本生物科学者協会編
 定価5,760円(税込)
 ISBNコード540seibutu
 発行日不定/期
 出版農山漁村文化協会(農文協)
 判型/頁数B5 64ページ

獣医師募集

(有)士別動物病院では下記のとおり、獣医師を募集しています。

記

施設名：(有)士別動物病院

所在地：〒095-0371

士別市上士別町15線南4

職種：獣医師

業務：牛の診療、人工授精、肉牛牧場等の衛生指導

勤務時間：8時～17時

給与：新卒または未経験者 30万

3年以上の経験者 40万以上

賞与：年2回(年間4か月以上)

休日：原則週休1日(応相談)

社会保険：厚生年金・健康保険・労災・退職金制度あり

その他：酪農、肉牛を中心に診療しています。
 自由な環境で、畜主としっかり向き合う時間と余裕もあります。
 是非、お気軽に見学に来て下さい。

連絡先：TEL 0165-24-2271

FAX 0165-24-2270(田口)

HP：<http://www.shibetsu-animal-hp.com>

(ホームページに問い合わせフォームがあります)

獣医師募集

(有)紋別家畜診療センター・南ヶ丘動物病院は小動物獣医師を募集しています。外科手術年間約500例あります。

施設名：(有)紋別家畜診療センター・南ヶ丘動物病院

所在地：〒094-0014 紋別市南ヶ丘町7-20-22

求人数：1～2名

給与：副院長：年俸1000万

勤務医：年俸700万～

新卒：月30万

パート勤務も可

賞与：年2回

昇給：年1回

休日：4週6休

待遇：雇用、労災、健康保険、厚生年金加入、退職金制度あり、住宅手当、通勤手当、セミナー学会参加費支給

連絡先：TEL：0158-24-1222

携帯：090-4872-2902